

乳腺領域の画像診断において、「高濃度乳房」におけるマンモグラフィ検診の感度が低いことが指摘され、受診者への高濃度乳房通知の是非や高濃度乳房に対する有効な追加検査の有無について関心が高まっています。2017年3月には、日本乳癌検診学会・日本乳癌学会・日本乳がん検診精度管理中央機構の関係3団体が、「対策型乳がん検診における『高濃度乳房』問題の対応に関する提言」を発表しましたが、今後の動向が注目されています。また、乳腺領域の画像診断技術も日々進歩しており、「高濃度乳房」に対する適用が期待されます。そこで、本特集では、対策型乳がん検診における高濃度乳房問題に対応する提言・報告書について取り上げるとともに、高濃度乳房に対する有効な画像診断技術の可能性を探ります。

企画協力：植松孝悦

静岡県立静岡がんセンター乳腺画像診断科兼生理検査科部長

「高濃度乳房」問題をめぐる動向と 画像診断技術の最新トピックス

わが国の乳がん検診と 画像診断技術の最新動向

植松 孝悦 静岡がんセンター乳腺画像診断科兼生理検査科

わが国の乳がん患者数は年々増加し、女性の罹患するがんの第1位となっている。さらに、ほかのがん腫と比べ、40～50歳代前半の比較的若い世代で、社会と家庭の中心の女性に罹患が多いことが大変問題であり、その年代の女性の乳がん罹患と乳がん死は、社会的損失が非常に大きいと言える。マンモグラフィ検診が乳がんの早期発見に有用であり、欧米では死亡率減少効果も証明されているが、日本ではマンモグラフィ検診の受診率が非常に低いため死亡率減少効果は見られず、日本での乳がん死の増加が続いている。このような背景の下、わが国の乳がん検診の

充実ならびに受診率の向上が急務となっている。そして、乳がん検診および乳がん画像診断能力とその技術の向上が、適正な乳がん治療に寄与することには疑いの余地もなく、さらなる乳がん画像診断の精度向上が求められる。この期待に応えるためには、新技術の開発とともに、従来のモダリティを組み合わせて総合的に診断するマルチモダリティ乳がん画像診断法の習熟が必要である。

一方で、最近、高濃度乳房におけるマンモグラフィ検診の感度が低いことが日本でも話題となり、受診者への高濃度乳房通知の是非や、高濃度乳房に対する有

効な追加検査の必要性についてマスメディアも注目している。2017年3月に、日本乳癌検診学会、日本乳癌学会、日本乳がん検診精度管理中央機構の乳がん検診の関係3団体が、「対策型乳がん検診における『高濃度乳房』問題の対応に関する提言」をとりまとめて、その内容をおのおののホームページで公表している^{1)~3)}。その内容と詳細な解説は、本特集で日本乳癌検診学会デンスプレスト対応ワーキンググループ委員長である笠原善郎先生からわかりやすく執筆していただいた(5～7ページ)。なお、本稿では、高濃度乳房問題をめぐる動向について正しい理解ができるように、